

平成 31 年度(前期日程)

入学者選抜学力検査問題

# 国 語

(国語総合・現代文B・古典B)

試 験 時 間 120 分

文学部, 教育学部, 法学部, 医学部(保健学科看護学専攻)

問 題	ページ
㊦～㊨	1～12

## 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで, この冊子を開いてはいけません。
2. 各解答紙に志望学部・受験番号を必ず記入しなさい。  
なお, 解答紙には, 必要事項以外は記入してはいけません。
3. 解答は, 必ず解答紙の指定された場所に記入しなさい。
4. 試験開始後, この冊子又は解答紙に落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所などがあれば, 手を挙げて監督者に知らせなさい。
5. この冊子の白紙と余白部分は, 適宜下書きに使用してもかまいません。
6. この冊子をとめている針金は, 解答時に取りはずしてもかまいません。
7. 試験終了後, 解答紙は持ち帰ってはいけません。
8. 試験終了後, この冊子は持ち帰りなさい。

※この冊子の中に解答紙が挟み込んであります。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

もう一昨年のことになるが、イギリスのオックスフォード辞典が、二〇一六年の「今年の言葉」として「ポスト真実(Post-truth)」を選んだと聞いたときはいまだに忘れられない。三〇年近くにわたってテレビメディア、しかも報道番組に関わってきた者として、「ポスト真実」、つまり客観的な事実や真実よりも、感情的な訴えかけが多くの人に影響を与え、世論形成に大きなインパクトをもたらし始めているとの指摘は、まるでこれまでの自らの仕事を否定されたかのように思えるほどの衝撃を私に与えた。

すぐに私は、当時、日経新聞に連載していたエッセイで、こう書いた。

「ポスト真実という言葉の誕生は、真実を取るに足らないものと受け止める社会の広がりのようにも思え、ジャーナリズムにとって深刻な事態だ」真実を踏まえて人々は判断するというのが健全な民主主義だったはずなのでは」。いささか青臭い問いだと書きつつも、これが正直な思いだった。

ポスト真実の時代、それは人々が、真実よりも自分の感情に寄り添う情報のほうを信頼してしまふ、自分が共感できることだけを信じるようになってしまふ時代だ。〆確証バイアス〆という言葉があるように、人は、自分があらかじめ共感できるものを裏付ける情報だけを重視する傾向がある。しかし、そういう情報だけを集めれば、自分もとから持っていた考え方をより強固にし、それに反する意見には耳を傾けないどころか、排除してしまうことにつながる。

フェイスブックでつながった友達、ツイッターでフォローしている人々から送られる情報にはかりアクセスしていると、多様な情報に接しているつもりでも偏った情報、自分が共感しやすいものだけに接してしまいがちになる。こうしたなかで多様な人々の存在、自分とは異なる多様な考え方があることを知る機会が減っていく。それぞれが固有の情報空間のなかでの対話だけを行うようになり、人々の間に情報の分断、お互いの排除さえ起きてくる。いま、社会はその傾向を強めている。

一九九三年から二三年間、「クローズアップ現代」<sup>※</sup>のキャスターを務めてきて、毎日が試行錯誤の連続だった。とはいえ、<sup>⑦</sup>ヘイソク感があふれる社会のなかで、様々な社会的課題に対し、その解決に向けての議論の場を提供し、合意形成を促していくことが「クローズアップ現代」の存在意義だと思ってきた。言わば、議論を促す情報のプラットフォームを提供する番組だと思っ続けてきたのだ。放送に向けて重ねられた記者やディレクターたちの取材と、それによって明らかにされた多くの事実の積み重ね。その事実をどういう視点から見っていくことで課題の本質が浮き上がってくるのかというフレームと、そのフレームを多角的に提供する番組ゲストや私自身の問いかけ。番組全体として、事実の持つ深さや豊かさを伝えようと努力をしてきた。

しかし、事実の持つ深さや豊かさではなく、たとえ根拠が定かでなくとも、感情的に寄り添いやすい情報に向かつて多くの人々が、そして社会が流されていくのであれば、合意形成を促す情

報のプラットフォームは、その役割を失ってしまふ。私が関わった「クローズアップ現代」に限らず、多くのジャーナリズムは、大なり小なり同じ役割を果たそうとしてきたわけであり、ポスト真実の時代の到来により、これまでのメディアはその存在意義を問われているように思える。

もちろん、これまでのテレビの報道番組、そしてジャーナリズムが、取材によって積み重ねられた事実を媒介として、視聴者や読者とともに安定した関係をキズいてきたわけではない。昨年出版した自著『キャスターという仕事』(岩波新書)で紹介したように、アメリカのジャーナリスト、デイビッド・ハルバースタムは、一九九三年の来日講演で、「視聴者は、すでに持っている偏見で違った習慣を持つ人たちを見ることを望んでいる。それは、偏見を取り除くために、より深く考えることよりも、既存の偏見を認めることのほうがはるかに楽だから」と語っている。視聴者は、あらかじめ自らが持っている感情を大事にし、たとえそれが偏見であろうと、その感情に訴えかけてくる情報に寄り添ったほうが楽なのだ。しかし、だからこそ、ジャーナリズムは存在しなければならぬとハルバースタムは二五年前に語っていた。感情的な訴えかけのほうの人々に影響を与えるからこそ、それにコウする<sup>⑦</sup>ように、ジャーナリズムは、人々がその偏見を乗り越えて、世界をありのままに見ることができ、より深い理解に至ることに役立たなければならぬのだ。

このことは、メディアに関わる者にとって自明だったはずであり、とりわけテレビメディアという、映像を主体とするメディアにとっては、感情に訴える要素が多いだけに、このことは重要だと私には思えた。テレビの報道番組において、視聴者の感情に寄り添おうとするテレビメディアが陥りやすい誘惑からどう逃れるかをつねに意識すること、二三年間の「クローズアップ現代」の経験はそれを教えてくれたのだ。

しかし、その思いとすれ違うように、<sup>②</sup>ポスト真実の時代は到来した。

メディアの視聴者や読者は、いまや楽であるからだけでなく、より積極的、能動的に、自らの感情や思いに沿ったものだけを、メディアが提供する情報のなかから選ぶようになったのだ。そして、そのことは、もう一歩進んで、自らの感情が一体化できる情報をより多く提供してくれるメディアだけに接するようになる傾向をも示している。情報をメディアから選択するのではなく、一体化できるメディアの選択へ<sup>⑧</sup>という変化が生まれつつあるように思える。

こうして、視聴者や読者、現在のメディアの受け手は、これまでメディアを通して得ていた、異質なものに触れる機会を失いつつある。

この背景になにかあるのか、明確な答えはない。しかし、この傾向が強まっていく社会に起こっていたのは、経済格差の<sup>⑨</sup>拡がり<sup>⑩</sup>と、それがもたらす不公平感の高まりだ。そのことと、自らが共感できる、感情が一体化できる情報だけを取り込み、異質なものは排除していくというポスト真実の流れは、無縁とは思えない。むしろ経済格差の拡大によって進みつつある社会の分断は、情報空間の分断によって一層進んでいくことになるかもしれない。

これまで受け手側のメディア・リテラシーの高まりのなかで、それにきちんと向き合うために

も、伝える側の人間は、思い込みや先入観、偏見から自由になることで、いかにして物事の本質に迫れるかという努力を重ねてきた。しかし、受け手自身が、真実や事実にこだわることを放棄してしまつたのならば、伝え手は、どう振舞おうとするだろうか。

危惧されるのは、受け手側が、事実や真実によりどこを求めめるのではなく、感情による一体化ができる情報だけを取り込むようになる、メディアもその受け手の感情に寄り添うように、受け手の共感を得やすい情報を積極的に流すようになることだ。それは視聴率や読者の増加につながる。そうになると、その感情に乗れない人にまで同調圧力をかけて、感情の一体化さえ促してしまうことにもつながる。

社会が分断され、加えて財政難と低成長にも直面するなか、課題が互いにカラミ合い、課題解決に向けた合意形成はますます難しくなっている。そして急速に進む技術革新によって、ますます時代の流れに個人が<sup>④</sup>ホンロウされるなか、一人ひとりが将来を考え、自分の生き方を選択していくことが困難になっていっているようにも思える。しかし、だからこそ長期的で多角的な情報を得て、自分の置かれた状況を俯瞰<sup>ふかん</sup>することが必要であり、多くの課題解決を目指した社会的合意形成に向けた対話に積極的に参加していかなくてはならない時代なのだ。その必要に依<sup>よ</sup>りて、異質なもの<sup>⑤</sup>の提示、多様性の提示というメディアの役割は一層重要になっていくはずだ。

今年も、憲法改正について、否<sup>いや</sup>応なく、社会的対話が必要になる年になるかもしれない。しかしポスト真実の状況がそのまま拡がっていくとしたら、そのようななかでは、本来求められる憲法についての社会的対話、熟議は行われようもないのではないだろうか。

「クローズアップ現代」のキャスターを辞めたとき、寄せられたお手紙に予想以上に多かつたのは、「見ていてすっきりしないこと、かえって考えさせられた」<sup>⑥</sup>ざらざらして分<sup>わ</sup>かりにくい。でもそれが良かった」という意見だった。見終わったあと、分からないことが残っているほうが新鮮だったというのだ。こういう感想を読んで、私はむしろ嬉<sup>うれ</sup>しく思った。いまは、なんでも、分かりましたという顔をしていなくてはならない風潮があるが、分からないものは分からないとして、もやもやが残ったほうがいいのではないだろうか。なにかがおかしい、なにか腑<sup>ふ</sup>に落ちない<sup>⑦</sup>の思い、そこから疑問が生まれ、問いを発していくことで社会的対話が生まれるのではないかと思う。

異質なものを、自分とは異なる人や思想に出会う場として、メディアやジャーナリズムは、今後機能してほしい。そして、そこから多くの問いが生まれ、社会的対話が活発に行われることを強く願う。

(国谷裕子「ポスト真実時代のジャーナリズムの役割」による)

(注) 「クローズアップ現代」……一九九三年からNHK総合テレビで放送されている報道番組のこと。現在の番組名は「クローズアップ現代+」。

問一 傍線部㉗から㉙の片仮名を漢字に直せ。

問二 傍線部㉑について、筆者がこのように感じた理由をわかりやすく説明せよ。

問三 傍線部㉒について、筆者は「ポスト真実」時代の到来によって、メディアに関して問題が生じると考えている。それはどのようなものか、わかりやすく説明せよ。

問四 筆者が必要だとする「社会的対話」とはどのようなものであるか、説明せよ。

次の詩(A)とこの詩をめぐって書かれた小説の一部(B)を読んで、後の問に答えよ。

A

鶯うぐひす（一老人の詩）

（私の魂）といふことは言へない

その証拠を私は君に語らう

——幼かつた遠い昔 私の友が

或る深い山の縁へりに住んでゐた

私は稀まれにその家を訪おもうた

すると 彼は山懐に向つて

奇妙に鋭い口笛を吹き鳴らし

きつと一羽の鶯を誘つた

そして忘れ難いその美しい鳴き声で

私をもてなすのが常であつた

然ししか まもなく彼は医学校に入るために

市まちに行き

山の家は見捨てられた

それからずつと——半世紀もの後に

私共は半白の人になつて

今は町医者まちいしやの彼の診療所で

再会した

私はなほも覚えてゐた

あの鶯のことを彼に問うた

彼は微笑しながら

特別にはそれを思ひ出せないと答へた

それは多分

遠く消え去つた彼の幼時が

もつと多くの七面鳥や 蛇や 雀すずめや

地虫や いろんな種類の家畜や

数へ切れない植物・気候のなかに

過ぎたからであつた

そしてあの鶯もまた

他のすべてと同じ程度に

多分 彼の日日であつたのだらう

しかも(私の魂)は記憶する

そして私さへ信じない一篇いっぺんの詩が

私の唇にのぼつて来る

私はそれを君の老年のために

書きとめた

※(伊東静雄『わがひとに与ふる哀歌』による)

B

(私の魂)といふことは言へない

その証拠を私は君に語らう

右の一節は、若い時のめぐり合い以来、つねに透明な意味をあらわしてきたというのではないが、僕にとって大切なものだ。しかも最近、それとの関係に新しい光がさしてくる体験があつたので、ひとつ短かい物語を書くことにした。詩の書き手は、声高に語るといふ人柄ではなかつたようだ。作品にもそれはうかがわれる。詩人の死後、おなじく好ましい寡黙さで、遺された作品ゆゑを註釈し・編纂する研究者たちがあることも知っていた。しかしこの国の風土の中でしばしば異様な共鳴音をたててひびく、ロマンティシズムの声調で作者を追懐する論者も数多かつたから、僕はこの詩への思いを人に語ることはなかつた。

もともと僕はこの詩といかにも若いうちに出会い、一挙にそれを理解したと信じてしまった。そこで、詩人の研究書に眼めをくぼる能力も余裕もないまま、むしろ権威のある解釈など意識的に避けてとおるようであつたのだ——すくなくとも、ある時期までは——。そのうち、この詩への思いこみはなまかなことでは作りかええぬ堅固さにかたまつてしまった。現在の僕は、若いうちに詩の読み方を良い師について「まなび」、身体感覚のなかで「おぼえ」、さらには魂において「よこる」、柳田國男流の教育システムが望ましいと考えているけれど……

まず僕が幼いような徒手空拳で出会い、深い印象を受けたままにこの詩のことを語っておくなら、最初の二行につづけて詩人は——まだ二十代であつたはずだが(老人の詩)としてこの詩を書いており、それも少年であつた僕が妙まじに惹ひきつけられる理由だつたという気がする——その幼時の思い出を語るのだ。

深い山のへりうへにある友達の家うちに遊びに行くと、いつもかれは山ふところに向かつて口笛を吹き、鶯うぐいすを呼びよせた。そしてその歌を聞かせてくれた。やがて友達は市の医学学校まぢに行つてしまふ。ふたりとも半白の頭髮をいただくようになって、町医者となつた友達と再会したが、この話をすると、かれは特別にはそれを思い出さないと云う。

しかも(私の魂)は記憶する

そして私さへ信じない一篇の詩が

私の唇にのぼつて来る

私はそれを君の老年のために

書きとめた

①このようにして成立したとされる詩を、まだ少年の僕が読んで、それまで印刷されたものをつうじて経験をしたことのない激しさの感情をあじわったのである。身体の内芯に火の玉があり、その熱でシュツシュツと湯気がたつような涙が噴出するのに茫然としながら……

まったく、こうしたことはある、と僕は感じ入っていたのだ。その時、僕はやはり山のへりの生家に、新制高校三年の夏休でかえってきたところ。この年の七月、創元社の選書で出た詩集をなんらかの本能にみちびかれてすぐさま買っていたことが、いま詩人の年譜を見てわかる。狭い川をへだてる栗の林には時鳥や郭公が啼き、それは直接この前の帰郷の際の鶯の声を思い出させた。こちらにも鶯を呼ぶことにたくみで、そのみならず僕にこの谷間の植生に始まり宇宙のなりたちにもいたるまで、それこそ森羅万象の指南をしてくれた友達は村を去っていた。僕の方も市に出ているながら、しかしかれが去ったことを不当に感じていた。やがて自分らは再会するにちがいないが、たがいに半白の頭をかかげながら話すうち、友達は僕に教えてくれた最上のことは忘れていることを認めるだろう、特別にはそれを思ひ出せない、微笑しながらであれ……その時、僕はなお、しかし(私の魂)は記憶する、と静かな確信をこめていいかえしうるだろうか？(私の魂)といふことは言へない、とも……

僕はこの詩を、文字使用のいちいちまで正確に誦(そと)んじることになった。幼時には正字で覚えていた漢字を、新しい教室の習慣のまま、ためらわないうで当用漢字に置きかえてしまっていたにもかかわらず、僕には詩人の用いる文字と仮名づかいがいちいち動かしがたく感じられたのである。なぜならそれはそのように、自分の老年のために書きとめられたものであるから……

②鶯という字。あらためて僕は父親が死のまぎわまで枕許に置いていた辞書で引いてみた。この詩を受験勉強の数学の計算用に使っていた藁半紙に書きうつして眺めるうち、いかにも神秘的な文字に思えてきたから。しかし辞書には、小鳥の名、うぐいす、とのみ書かれていた。僕は失望したが、思いついて別の字を引いてみることにした。そして着想は正解であったのだ。この時から、僕にとって辞書が特別な意味を持ち始めたという気さえする。

螢。形成「然」(「火をめぐらす」+「虫」。光を放つて飛びまわる虫の意。それならば鶯は、火をめぐらすように、光を放つように、歌いながら飛びまわる鳥ではないか。さきの春、栗林と川には生まれた藪に鳴きみちていた鶯がまさにそうだった……

僕はこの漢字のかたちと音についての、幾千年前の、それも外国人による説明を、いま現にこの一瞬の過ぎ去る現象として自分の耳によみがえる鶯の声をとおして納得していた。かつてはすぐにも夕暮が来て川岸にあふれるはずの螢のイメージを媒介に、さらに一段上の秘密を教えら



れているようにも感じたのである。教えられていることの内容を、また自分の言葉にすることはできない。しかしそれは、ほかならぬいま、自分が書きうつしている詩につながっているはずのものだ……

(私の魂)といふことは言へない

しかも(私の魂)は記憶する

十八歳の僕が感じとっていたことを、いま老年に進みよって自分の言葉で書きとめるとすると、それはこういうことになるだろう。個を越えた、そして個を含みこむ(私の魂)の光の群がりに向けて、一匹の螢として自分も光りながら飛んでゆく。そのために自分のこれからの生がある。そうしたことはもうずっと以前から(私の魂)につながる自分が知っていたことだし、それ以上のことは(私の魂)の外に個としてあるかぎり、いつまでも知ることができない……

(大江健三郎「火をめぐらす鳥」による)

(注) 伊東静雄……長崎県諫早市出身の詩人(一九〇六—一九五三)。

問五 傍線部①について、Bの小説中の「僕」がそのような「感情」を経験した理由をわかりやすく説明せよ。

問六 傍線部②について、Bの小説中の「僕」の解釈を示す一節を、本文中から二五字以上三〇字以内(読点を含む)で抜き出せ。

問七 Aの詩中の表現「私の魂」について、Bの小説中の「僕」はどのようなものとして解釈しているか。「僕」の「驚」という字の理解を踏まえた上で、その解釈の内容をわかりやすく説明せよ。

次の文章は、白居易(白樂天)が漢詩「琵琶引」を詠じたときの様子を題材とした物語である。白居易はこの当時江州の司馬に左遷されていた。読んで後の問に答えよ。

昔、元和十五年の秋、白樂天罪なくして江州といふ所に流されぬ。次の年の秋、入り江のほとりに、夜、友を送りけり。松風、波の音、身にしむ夕べ、愁への涙いと抑へ難く、小夜も更け行くほど、空澄み渡る月の光、波にしたがへるを見ても、我が身独りは沈まざりけりと思ひ乱れつつ、人もなきさを物心細くて歩み行くに、波の上遙かに、琵琶の調べ様々に聞こえて、搔き合はせなどの有り様、世に類なきほどなり。これを聞くにあやしき心抑へ難し。海人、武士より外に、誰かはまた情けあるべきとおほえければ、声をしるべにて、「誰の人にか」と尋ね問ふに、「我はこれ商人の妻なり。昔、齡ひ十三にて、琵琶を習ひ得たること世に優れたりき。帝の御前にて一度調べしに、百の御引き出物を賜ひき。また色かたちにめでて、見る人聞く人さながら思ひをかけ、心を尽くせりき。しかれども、春過ぎ秋暮れて、見目形ありしにもあらず衰へにしかば、世に経る力失せ果てて、せん方なくなりしより、商人に契りを結びて、この国の民となれり。商人情けなければ、我を惜しむこといと浅し。我を懇ろにせねば、出でて去ぬる後、立ち帰る思ひ怠りぬ。帰るほど遅ければ、みづから待たずしもあらず。かかるままには、ただ空しき舟を守りつつ、秋の月のすさまじきをのみ見る」と言へり。

白樂天、「我、琵琶の声を聞きて、愁へ深し。またこの語らひを聞くに取重ねたる心地す。我も君も愁への心同じからずや。必ずその愁への尽きせぬことを思ひ知るべし。我去んじ年の秋より官逃れ、都を離れてこの所に沈めり。また病の藪に伏して立ち居ることたやすからず。もとも心細き海面の波風より他に立ち交じる人もなき住処に、蘆の上葉を渡る風、遠近人の舟呼ばふ音のみ聞こえて、いまだ楽の声を聞かず。今宵の君が琵琶の声を聞くに、ほとほと天の楽を聞くが如し」。

これを聞く人皆涙を流せり。その中にも白樂天独り、袂朽ちぬと見えけり。

(「唐物語」による)

問八 二重傍線部と文法的に同じ意味をもつものを、波線部 a ～ f から一つ選べ。

問九 傍線部ア、イを現代語訳せよ。

問十 傍線部①とは、どのような「心地」か。本文に即して具体的に説明せよ。

問十一 傍線部②は、『源氏物語』須磨巻で、光源氏が須磨への退去を決意し、思い描いた須磨の様子、「さる心細からん海面の波風より他に立ち交じる人もなからんに」を踏まえる。ここで『源氏物語』を引用した筆者の意図を答えよ。

問十二 傍線部③はどのような状況を指すか。具体的に説明せよ。

四

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、返り点と送り仮名を一部省略してある。

獸<sup>ハ</sup>莫<sup>シ</sup>猛<sup>キモノ</sup>於<sup>ニ</sup>虎<sup>ヨリ</sup>。虎<sup>下<sup>レ</sup>山<sup>ヲ</sup></sup>百獸<sup>皆<sup>ニ</sup>竄<sup>ズ</sup>伏<sup>ス</sup></sup>、不<sup>ヘ</sup>敢<sup>テ</sup>微<sup>ワづカニモ</sup>露<sup>アラハサ</sup>其<sup>ノ</sup>形<sup>ケイ</sup>跡<sup>セキヲ</sup>。有<sup>ニ</sup>妖<sup>狐<sup>ト</sup>操<sup>リ</sup>弓<sup>ヲ</sup></sup>矢<sup>ヲ</sup>、人<sup>立<sup>シテ</sup>当<sup>タル</sup>蹊<sup>ケイ</sup></sup>※

間<sup>カニニ</sup>。虎<sup>望<sup>ミ</sup>見<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>渠<sup>ノ</sup>子<sup>ト</sup>且<sup>チ</sup>射<sup>ス</sup>己<sup>ヲ</sup>也</sup>。即<sup>チ</sup>挺<sup>ギンデテ</sup>而<sup>シテ</sup>※

走<sup>リ</sup>、上<sup>ル</sup>林<sup>リン</sup>薄<sup>ボニ</sup>。狐<sup>不<sup>レ</sup>禁<sup>レ</sup>喜<sup>ブニ</sup></sup>、大<sup>イニ</sup>罵<sup>リテ</sup>曰<sup>ク</sup>、「未<sup>イマダ</sup>シキカナ<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>※

於<sup>ヲ</sup>菟<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>、雖<sup>モ</sup>猛<sup>シト</sup>焉<sup>クンゾ</sup>能<sup>ク</sup>敵<sup>セン</sup>我<sup>ニ</sup>哉<sup>ト</sup>。虎<sup>聞<sup>キテ</sup>識<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>声<sup>ヲ</sup></sup>、

反<sup>シテ</sup>走<sup>ル</sup>而<sup>シテ</sup>齧<sup>カム</sup>其<sup>ノ</sup>喉<sup>ヲ</sup>。狐<sup>之</sup>肉<sup>尽<sup>ク</sup></sup>為<sup>リ</sup>虎<sup>之</sup>舗<sup>ホト</sup>、唯<sup>ダ</sup>※

丘<sup>ノ</sup>首<sup>ニス</sup>存<sup>ス</sup>焉<sup>ト</sup>。故<sup>ニ</sup>仮<sup>カル</sup>人<sup>ノ</sup>威<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>、暫<sup>クハ</sup>則<sup>チ</sup>可<sup>ナルモ</sup>、久<sup>シケレバ</sup>則<sup>チ</sup>敗<sup>ス</sup>。

※(秋山玉山「雑説」による)

(注) 竄伏……………逃れ隠れること。

人立……………人のように直立すること。

蹊……………山の小道。

渠子……………中国古代の弓の名人熊渠子のこと。

林薄……………草木が混じりあつて生えている場所。

於菟……………楚の方言で、虎の異称。

舗……………食物、食料。

丘首……………狐は死ぬとき、必ず頭を生まれた丘に向けるという。ここでは狐の首のこと。

秋山玉山……………肥後熊本藩の儒者(一七〇二—一七六四)。名君の誉れが高い細川重賢に重用

され、藩校時習館の初代教授となった。

問十三 傍線部①を書き下し文にせよ。

問十四 傍線部②を現代語訳せよ。

問十五 虎が傍線部③のような行動に出たのはなぜか。虎・狐・渠子の三者の力関係を考えた上で、その理由をわかりやすく説明せよ。

問十六 筆者がこの文章をとおして説いている教訓を、文章全体を踏まえて記せ。